

(論文)

会話場面における視線行動と満足度および印象評価の検討

土屋裕希乃

キーワード

視線行動 アイコンタクト スマイル 印象評価 アイマークレコーダー

問題

我々は他者とのコミュニケーションの中で視覚的に多くの情報を入手し、相手の視線の動きや表情によって態度や感情を認知することが可能である。また人は目から様々な情報を得るだけでなく、目によって自分の意思や態度を表現することができる。視線の機能としてKendon (1967) は、表情や姿勢、身振りといった対人情報を視覚的に入手する情報収集機能、視線によって自己のメッセージを強めたり修正する感情表出機能、相互作用の際に発言の交代を促すといった会話の調整機能の3つがあることを指摘している。

それだけではなく他者に視線を向けることは相手への関心や好意を知らせるサインにもなる。対人相互作用において相手からの視線を受け取ることは「自分の話を聞いてくれている」という安心感や相手に対する好意につながり、視線を向けられていないと感じた場合には不安や自分への無関心を感じることもあるだろう。先行研究でも視線と印象の関連について多くの研究がされており、例えば視線量の多さは友好的や誠実といった肯定的評価をされるのに対し、少なさは冷淡や防衛的といった否定的評価につながることを示されている (Kleck & Nuessele, 1968)。それ以外にも視線量の多さは自信があるとみなされること (Tessler & Sushelsky, 1978)、より説得力があるとみなされること (Hornik & Ellis, 1988)、肯定的な感情情報の処理を促進すること (Adams & Kleck, 2003)、交流の親密性を作り出すこと (Anderson et al., 2006) などが指摘されている。

日本でも飯塚 (2004) の研究では男女大学生が会話をしている様子を刺激映像とし、視線量多条件と視線量少条件の2つの刺激映像を参加者に見せ、印象評価の違いを検討している。その結果参加者は相手を多く見つめる人をより誠実で、不安が少なく、くつろいでいると評価したことが示されている。また土屋 (2012) は就職面接場面を対象に参加者の非言語行動と面接官の採用評価の関連について検討し、アイコンタクト量と協調性評価についての関連が認められたことを報告している。「目は口ほどにものを言う」という言葉の通り、視線の持つ意味は多様であるといえる。

対人相互作用場面における視線行動については、ソーシャルスキルの高さ (村山・朝井・福井・三浦, 2012) や親和欲求の高さ (Argyle, 1983) が関係することが示されているが、返報性も視

視線行動に関連すると考えられる。返報性とは相手のコミュニケーション行動と同様の反応を返すことであり、Altman (1973) は対人関係の初期段階で返報行動は特に重要となることを指摘している。相手の視線に対して視線を合わせること、つまり相手とアイコンタクトを取ることは返報行動として適当であると考えられるため、本研究でも検討したい。

村山ら (2012) は映像に映る会話相手の視線の有無による視線行動の違いを検討しているが、視線の有無によって参加者の視線行動に差は見られず、返報性については支持されなかった。ただし、村山ら (2012) の使用した会話相手の映像刺激は言葉を発することはなく直接的な相互作用がない状況であったため、視線量に影響を及ぼさなかったということが示唆されている。つまり、実際の対人相互作用場面に近づけて視線の有無による視線行動の違いを検討した場合、異なる結果となる可能性がある。そこで本研究では実際の会話場面により近づけるために、映像に映る会話相手から質問を受けるという形で疑似会話場面を設定し、視線行動の違いを検討することとする。

しかし当然のように人は顔の一部である視線だけを認知するのではない。他者への注意は主に顔に向けられるため表情にも着目する必要があるだろう。Ekman & Friesen (1975) によると表情は主に内的感情をあらわすものであり、生まれつき備わっているものである。相手からの視線に対する視線行動を検討するためには表情を統制する必要がある。そこで本研究では無表情の人物との会話を設定し検討することとするが、Fridlund (1994) によると表情は何をしようとしているかを呈示するものであり、実際に我々も対人相互作用場面においては無表情を維持していることはほとんどなく、肯定的な印象をもたらすために意図的に笑顔をつくることも多くあるだろう。

Patterson (1983) は笑顔がもたらす機能として、親密さを呈示する親密さ表出機能、他者からの肯定的な印象を形成する印象管理機能、そして他者からの望ましい反応を促進するフィードバックと強化機能の3つがあることを指摘している。また笑顔がもたらす印象については多くの研究がされており、笑顔を表出する者はより信頼感を得られること (Bugental, 1986)、親近感があること (Argyle, 1972)、誠実にみられること (Ekman, Friesen, & O'Sullivan, 1988) 魅力的だと評価されること (大坊 1997)、肯定的に受け取られること (山口・小口, 1998)、社会的で知性的とみなされること (Matsumoto & Kudoh, 1993) などが挙げられ、笑顔における対人印象は西洋文化、東洋文化関係なく肯定的に評価されることが示されている。より実際の対人相互作用場面に近い対人場面を設定する場合には、笑顔表出での会話場面も合わせて設定する必要があると考えられる。

目的

本研究では相手の視線の有無により、会話場面での視線行動の違いを検討するとともに、実際の対人相互作用場面に近づけるために笑顔を表出した上での視線行動の違いを検討することを目的とする。また会話相手の視線や表情表出による印象評価の違いについて検討する。視線量および笑顔についてはいずれも肯定的評価が多く報告されているため、視線が向けられ、なおかつ笑顔が表出されている場合には好意的な印象を持たれやすいと考えられる。しかし視線が向けられていても笑顔の表出がなかったり、笑顔であっても視線が向けられていない場合には、肯定的な効果が薄まり、否定的な印象につながってしまう可能性も推察される。そこで以下の3つの仮説を設定する。

- 仮説1 相手が視線を向けている場合、アイコンタクト量は増加する。
- 仮説2 相手が視線を向けている場合、肯定的評価が高まる。
- 仮説3 相手が視線を向け、笑顔を表出している場合には肯定的評価は高まるが、視線と笑顔のどちらかが呈示されない場合には肯定的評価は抑制される。

方法

実験参加者 都内の私立大学学生71名（男性16名 女性55名、平均年齢19.77歳）が実験に参加した。事前に刺激の判断において問題のない視力であることを確認している。

実験条件 笑顔群と無表情群を設定し、実験参加者をランダムに割り振った。笑顔群37名、無表情群34名であった。

使用機器 実験参加者の視線記録のため、アイマークレコーダー（nac製 EMR-8B）、デスクトップパーソナル・コンピュータ（DELL製 XPS8500）およびデジタルビデオカメラレコーダー（SONY製 DCR-HC88）を用いた。ディスプレイと実験参加者の距離を約50センチ空けた。視線行動の分析のためにEMR-dFactory（nac製 EMR-dFactory Version ver.1.2.0）とデジタルHDビデオカセットレコーダー（SONY製 GV-HD700/1）を使用した。

手続き 実験協力同意を得た参加者に対して、1名ずつ大学実験室にて実験を実施した。参加者はPC画面に向き合う形で着席し、実験者がアイマークレコーダーの設定を行った。笑顔群、無表情群でそれぞれ2つの映像を続けて再生し、映像の中の会話相手から提示される3つの質問に回答する形で会話を実施した。映像は参加者に視線を合わせているものと、参加者から視線を逸らして下方を見ている2種類である。2つの映像の順番についてはカウンターバランスを取って試行順を決定し、刺激映像の前後には白画面（10秒）を提示した。再生を開始する前に参加者には、途中で話が途切れてしまった場合でも思いつくまま話を追加し会話を続けるよう求めた。2つの映像の再生が終わった後、質問紙に回答させ実験終了とした。

測定 会話中に関する肯定的評価に関する項目を10項目作成した。「1. 全く当てはまらない」～「5. 非常にあてはまる」までの5件法で回答を求めた。

刺激映像 実験参加者と面識のない女性協力者（21歳 大学生）に依頼をし、60秒の映像を4種類作成した。女性の肩から上を映し、60秒の映像の中で3つの質問を参加者に向かって投げかける映像を刺激とした。刺激映像のうち無表情・視線有条件と笑顔・視線無条件の画像を図1に、また質問内容を表1に示す。同内容の質問では2回目の再生で会話の予測が可能となり、会話についての評価に影響することが考えられるため、会話相手からの質問は話題の水準を合わせて2種類設定した。無表情群では1と3の映像を、笑顔群では2と4の映像を再生した。なお、質問をするスピード、質問と質問の間の時間を操作し、すべて同じタイミングで質問が投げかけられるよう設定した。



図1 刺激映像
(左：無表情・視線有条件／右：笑顔・視線無条件)

表1 刺激内容

刺激	実験条件	内容
1	無表情・視線有条件	①あなたの名前を教えてください。 ②大学生活は楽しいですか。
2	笑顔・視線有条件	③最近あった嬉しかった出来事を教えてください。
3	無表情・視線無条件	①あなたの学科を教えてください。 ②心理学の勉強は楽しいですか。
4	笑顔・視線無条件	③もし夢がかなうとしたら、何を願いますか。

結果

因子分析

映像に関する全10項目について因子分析を行った。因子の抽出は最尤法で、プロマックス回転により実施した。因子数1で初期値を求め、スクリー基準によって因子数を想定し分析を行った。その結果2因子構造を選択し、因子負荷量が.35未満の2項目を削除し8項目により再度最尤法、プロマックス回転による因子分析を実施した。最終的な因子分析の因子負荷量及び因子間相関を表2に示す。

第一因子は「自分の話した内容について満足している」「うまく話げできた」といった項目から構成されているため、「会話満足度」と命名した。内的整合性を検討するためCronbachの α 係数を算出した結果、 $\alpha = .77$ となり、高い信頼性を示しているといえる。第二因子は「画面の相手に親しみやすさを感じた」「画面の相手は話を好意的に聞いてくれているように感じた」といった項目から構成されているため、「印象評価」と命名した。同様に α 係数を算出した結果、 $\alpha = .85$ となり高い信頼性が示された。

表2 因子分析結果

	因子1	因子2
自分の話した内容について満足している	.84	
上手く話げできた	.79	
リラックスして話げできた	.64	
話をしているときに気まずさを感じた	-.49	
画面の相手の目を見て話げすることができた	.41	
画面の相手に親しみやすさを感じた		.93
画面の相手は話を好意的に聞いてくれているように感じた		.83
話しやすかった		.51
因子間相関	因子1	因子2
	—	.59
	因子2	—

4

視線行動の検討

条件ごとのアイコンタクト量を検討するために、アイマークレコーダーを用いて分析を行った。映像画面を12分割に切り取り、60秒のうち会話相手と視線を合わせた箇所の停留時間を算出した。

そして視線条件および表情条件によるアイコンタクト量の違いを検討するために、単純主効果の検定を行った。その結果、無表情群においてのみ、視線有条件が視線無条件に比べ有意にアイコン

表3 条件によるアイコンタクト量の違い

		アイコンタクト量		
		M	SD	F
無表情群	視線有条件	34.15	16.29	7.86 **
	視線無条件	28.79	15.24	
笑顔群	視線有条件	31.13	16.26	.01
	視線無条件	31.31	15.62	

** $p < .01$

タクト量が多いことが示された [$F(1,69) = 7.86, p < .01$]。笑顔群については有意差は示されなかった。また、視線条件ごとの無表情群と笑顔群の違いについてはいずれも有意差は示されなかった。会話相手が笑顔だった場合には視線の有無にかかわらず視線は60秒間の会話のうち半分の約30秒でアイコンタクトを取っていたが、無表情の場合には視線有条件の方がより視線を会話相手の目に合わせていたことが示された。結果を表3に示す。

会話満足度および印象評価得点の検討

視線条件および表情条件による会話満足度及び印象評価得点の違いを検討するためにそれぞれ単純主効果検定を実施した。その結果、会話満足度については笑顔群において、視線有条件は視線無条件に比べ有意に得点が高いことが示された [$F(1,69) = 16.91, p < .001$]。無表情群については有意傾向であるが同様に視線有条件の方が得点が高いことが示された [$F(1,69) = 3.47, p < .10$]。

印象評価についても単純主効果の検定を行った結果、無表情群、笑顔群ともに視線有条件が視線無条件に比べ有意に得点が高いことが示された [$F(1,69) = 7.11, p < .01; F(1,69) = 27.93, p < .001$]。また実験条件群ごとの単純主効果の結果、視線有条件において笑顔群が無表情群に比べて有意に印象評価得点が高いことが示された [$F(1,69) = 12.33, p < .001$]。視線無条件では有意差は認められなかった。会話満足度得点についてはいずれの視線条件においても有意差は示されなかった。記述統計量とF値を表4と図2に示す。

会話満足度について、笑顔群は視線有条件が中点である3.07点に対し、視線無条件では2.57点と低い値を示している。無表情群についても同様の傾向が示された。印象評価については、笑顔群において視線有条件が3.53点とやや肯定的な評価をしているのに対し、視線無条件では2.64点と低い値となった。無表情条件では視線有条件でも2.80点と中点に達することはなく、視線を参加者に合わせたとしても表情によって印象評価に差が出ることを示された。

表4 条件による会話満足度および印象評価得点の違い

		会話満足度			印象評価		
		M	SD	F	M	SD	F
無表情群	視線有条件	2.92	.75	3.47 [†]	2.80	.86	7.11 **
	視線無条件	2.69	.72		2.35	.73	
笑顔群	視線有条件	3.07	.79	16.91 ***	3.53	1.04	27.93 ***
	視線無条件	2.57	.82		2.63	.85	

[†] $p < .10$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

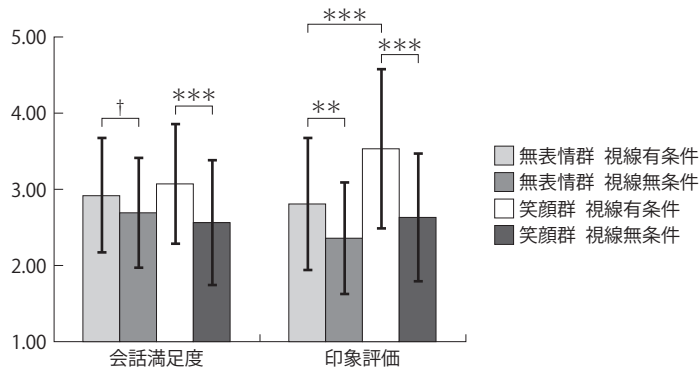


図2 各条件群での会話満足度及び印象評価得点

考察

本研究では映像の中の会話相手との2者会話場面を設定し、会話相手の視線の有無および表情によって視線行動や肯定的評価に違いがみられるかを検討するため、下記の仮説を設定し実験を実施した。

- 仮説1 相手が視線を向けている場合、アイコンタクト量は増加する。
- 仮説2 相手が視線を向けている場合、肯定的評価が高まる。
- 仮説3 相手が視線を向け、笑顔を表出している場合には肯定的評価は高まるが、視線と笑顔のどちらかが呈示されない場合には肯定的評価は抑制される。

視線・表情の有無によるアイコンタクト量の違い

単純主効果検定の結果、表情を統制した無表情群において、視線有条件が視線無条件に比べて有意にアイコンタクト量が多いという結果が示された。よって仮説1は支持されたといえる。視線を向けられている方が会話相手に対してより視線を合わせ、視線を向けられていない場合には相手の目を見ること自体少なくなるという結果から、視線行動においても相手と同程度、もしくは類似の行動を取る返報性が認められたと考えられる。アイコンタクト量については視線有条件の場合でも34.15秒と60秒間凝視している会話相手よりは少ない時間であるが、Kendon (1967) が対人相互作用の際に約50%は相手に視線を向けていると指摘していることから、会話中継続的に凝視していることはむしろ不自然であり、適度な視線外しが自然な視線行動といえ、適切な範囲内で互いの視線量が均衡するように調節することが示されたのではないかと推察される。それを支持する研究として深山・大野・武川・沢木・萩田 (2002) も凝視は威圧感を与える可能性があるため適度な視線外しが必要であるとしている。会話相手から常に凝視されている状態で会話を試みることは威圧感や気詰まりを感じさせたと考えられ、それらを抑制するために視線を外した可能性が示唆される。

また無表情でかつ視線が自分に向けられていない場合には、冷淡で否定的な印象につながりやすく、さらに自分への興味や関心の低さを感じとり、参加者も防衛的に相手の目を注視することを避け、アイコンタクト量が少なくなったのではないかと考えられる。また笑顔群については視線の有無による有意差は認められず、いずれも約50%のアイコンタクト量であった。これは笑顔がもたらす効果として指摘されている親近感 (Argyle, 1972) や社交性 (Matsumoto & Kudoh, 1993) が影響したと考えられる。それにより、視線を向けられていないことによる否定的印象が薄まり、

50%という適切な視線量を維持することにつながったため、会話相手の視線の有無にかかわらず、それ以上アイコンタクト量が増えなかったのではないかと推察される。会話場面における実際の視線行動を測定した実験はまだ数が少ないため、本研究の結果は対人相互作用における視線行動をより詳細に示した点で意味のある結果といえよう。

視線・表情の有無による会話満足度および印象評価の違い

単純主効果検定の結果、無表情群において会話満足度は有意傾向による差が示され、印象評価については有意に視線有条件の得点が高いことが示された。よって仮説2は部分的に支持されたといえる。本研究では表情統制の役割のため無表情条件を設定したが、無表情、つまり笑顔を表出しないことは否定的印象につながりやすいともいえる。しかし視線を向けているか否かによって会話満足度や特に印象評価に違いが見られ、視線行動が肯定的評価を高める一助となっていることが示された点で、視線行動の持つコミュニケーションツールとしての重要性を高める結果となったといえよう。

また笑顔群でも会話満足度および印象評価得点がいずれも視線有条件が有意に高い得点を示し、表情における比較の結果でも視線有条件において笑顔群が無表情群よりも有意に印象評価得点が高いことが示された。印象評価について笑顔・視線有条件が最も得点が高く、それに比べ笑顔だけ提示された笑顔・視線無条件および視線のみ合わせている無表情・視線有条件は有意に得点が低いことが明らかとなった。よって仮説3は支持されたといえる。

視線行動も笑顔もそれぞれ単独の効果は多くの先行研究で示されている通りだが、アイコンタクトを取り、かつ笑顔を表出している方が印象評価が高まることが認められた。山口（2011）は模擬面接場面における自己呈示行動のうち、最初の段階から笑顔とアイコンタクトを表していた者は、アイコンタクトのみを表していた者よりも第一印象が良く、好感をもたれ、能力があり一緒に仕事をしたい人であるという評価を得たことを示しており、本研究もそれを支持する結果となったといえる。他者へ視線を向けたり笑顔を表出すること自体は他者からの肯定的評価を引き出す有効な手段であるが、対人場面においてそれぞれ単独で評価を受けるのではなく、他のコミュニケーションツールと合わせて複合的に評価されていると考えられる。Schlenker（1980）は、対人場面では「外見・話し方・行動・評判」といったさまざまな情報を分類・整理して、相手がどのような人物であるかという印象を形成することを明らかにしており、対人場面においては多様な非言語的行動が印象評価を左右するといえる。円滑なコミュニケーションを取るためには視線や表情を相手に与えたイメージに合わせてコントロールすることが必要であると考えられる。

また会話満足度についてはいずれの表情条件においても視線有条件の得点が高いことが示され、擬似会話という場面においてもうまく会話することができたという自己評価が高まることが証明された。他者へ視線を向けることは相手へ関心を伝える効果があるため、視線を向けられた状態で話をする際「自分の話を聞いてくれている」という安心感につながり、視線無条件時に比べて、会話満足度の項目にあるようにリラックスしてうまく話ができたと感じることであったのではないかと推察される。会話満足度得点は笑顔・視線有条件でのみ中点である3点到達し、それ以外では3点に満たない数値であるが、PC画面を介しての擬似会話場面であることや、見知らぬ他者から質問を投げかけられる形式での会話では、緊張感が高まり全体的に自己評価が低いことも当然の結果であろう。

今後の課題と展望

本研究では映像で映し出される相手との疑似会話場面において、表情や視線の有無による違いを検討し、その結果会話相手の視線や表情により視線行動および会話満足度や印象評価が異なることが示された。

会話は相手の質問に答えるという形で実施したが、映像の人物との疑似会話だとしてもそれが「会話」としての性質を高め、対人相互作用場面として他者の存在を意識し会話を行うことができたのではないかと考えられる。しかし、視線行動の研究においては追試をしても結果が異なる再現性の低さも指摘されているため、今後もこの結果が当てはまるのか引き続き検討する必要があるだろう。

本研究では実験条件を、会話相手の参加者向けの視線量を0か100かの2条件のみで実施している。ただ実際の会話では常に凝視していたり、全く目を向けていないことはあまりなく、視線量には個人差があるものの50%の視線量が自然であると指摘されている (Kendon, 1967)。Argyle, Lefebvre, & Cook (1974) の研究でも視線量が多いほど他者からの評価は向上するが、ずっと見られ続けることは好まれないことを示している。また Kelly (1978) でもアイコンタクトを多く示すカウンセラーは少なく示す場合よりもより良い評価をされたが、中程度の視線量でも視線量が多い時と同様の効果があると示唆されている。そのため、実際の対人相互作用により近づけるのであれば視線量を細かく設定し検討することが必要であるだろう。また視線を合わせるタイミングについても検討課題といえる。参加者が話をしている際に一定のタイミングと時間で目を逸らせる訓練をして刺激映像を作成したり、もしくは実験協力者を用意し Skype といったオンラインビデオ通話を使用するといった会話場面を設定し、そこでの視線行動を検討することでより実際の対人相互作用に近い精度の高い結果を示すことができるのではないかと考えられる。

また、本研究の質問内容はポジティブなものに統一されていたが、ネガティブな内容により視線行動や満足度、印象評価に違いが出る可能性がある。村山ら (2012) の研究ではポジティブな感情価の話題の方がネガティブな感情価の話題よりも会話の満足度が高いことを示している。追研究では会話内容を変え、再度実施することを検討したい。

しかし、映像の中の人物と会話をするという実験条件下においても、表情や視線によって満足度や相手への印象が左右され、笑顔・視線無条件や無表情・視線有条件のようにそれぞれ単独のツールのみ使用した場合には肯定的評価の効果は薄れてしまうという結果から、印象評価には対人相互作用場面で判断できる様々な非言語行動が重要になることを指摘できると考える。Mehrabian (1967) が他者から知覚される態度として、言語情報は7%でしかなく、38%が音声、55%が表情と計93%が非言語的情報から成り立っていると報告しているように、非言語的行動は対人コミュニケーション場面において重要なツールであるといえよう。

土屋 (2012) や Tsuchiya (2016) ではアイコンタクトトレーニングとスマイルトレーニングを開発し、対人場面での効果を検討しているが、本研究でアイコンタクトと笑顔の重要性が確認できたことから、円滑なコミュニケーション行動の促進のためにはトレーニングを実施することは有効であるといえよう。そのためにはトレーニングの精度を高め、多様な対人場面においてその効果を検討する必要がある。土屋 (2012) では就職面接場面を対人場面として設定し、採用評価との関連を検討しているが、アイコンタクトトレーニングおよびスマイルトレーニングいずれもトレーニングにより採用評価が高まることが示されている。また Tsuchiya (2016) では異性との初対面場面を設定しソーシャルスキルの関連を検討している。そしてスマイルトレーニングによって意図的表出スキルと解読スキルが向上し、アイコンタクトトレーニングでも解読スキルが向上することを報告している。トレーニングはいずれも意図的表出と解読の両スキルを向上させることを目的と

しているため、アイコンタクトトレーニングはスマイルトレーニングに比べまだ精度が高くなく、改良の余地があると結論付けている。

目は表情表現よりも統制しにくく、無意識に動きやすい領域であるため訓練の難しいアイコンタクトトレーニングについては先行研究でも扱われていない。しかし、不安に感じると目を泳がせてしまったり、下を向いて話してしまうといった個人では意識しにくい行動に気付き、安定した視線行動を意識することは対人場面において重要であると考えられる。ただ一方で視線を向けることが画一的に良いわけではもちろんない。Argyle & Cook (1976) は日本人は欧米に比べて他者への視線量を抑制することを指摘しており、必要以上に視線を向けることは否定的な印象や他者の否定的感情喚起につながる危険がある。適切な視線量は人によって異なるといえ、他者の反応を解釈した上で適切な視線行動を取ることが必要であろう。

最後に、本研究によりアイコンタクトや笑顔それぞれの単独の効果では肯定的な作用が抑制される可能性が示唆された。トレーニングではそれぞれ単独のスキルを伸ばすものではなく、アイコンタクトやスマイルというツールを通して総合的なコミュニケーションスキルの向上に努めているが、今後はアイコンタクトやスマイルを合わせたトレーニングも開発していく必要があると考えられる。

謝辞

本論文の作成にあたりご指導いただいた遠藤健治先生（青山学院大学）に心より感謝申し上げます。また、研究にご協力いただいた全ての方に厚く御礼申し上げます。

引用文献

- Adams, R.B., Jr., & Kleck, R.E., 2003, "Perceived gaze direction and the processing of facial displays of emotion," *Psychological Science*, 14: 644-647.
- Altman, I., 1973, "Reciprocity of interpersonal exchange," *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 33: 249-261.
- Anderson AK, Christoff K, Panitz D, De Rosa E, Gabrieli JDE, 2003, Neural correlates of the automatic processing of threat facial signals, *J Neurosci*, 5627-5633.
- Argyle, M., 1983, *The psychology of interpersonal behavior* (4th Ed.), London: Penguin Books Ltd.
- Argyle, M., & Cook, M. (1976). *Gaze and mutual gaze*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Argyle, M., Luc, Lefebvre., & Cook, M., 1974, "The meaning of five patterns of gaze," *European Journal of Psychology*, 4 (2): 125-136.
- Bugental, D.B., 1986, "Unmasking the "polite smile" situational and personal determinants of managed affect in adult-child interaction," *Personality and Social Psychology Bulletin*, 12: 7-16.
- Cook, M. & Smith, J.M.C., 1975, "The role of gaze in impression formation," *British Journal of Social and Clinical Psychology*, 14: 19-25.
- Ekman, P., & Friesen, W.V., 1975, *Unmasking the face A guide to recognizing emotions from facial clues*, Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Ekman, P., Friesen, W. V., & O'Sullivan, M., 1988, "Smiles when lying," *Journal of Personality and Social Psychology*, 54: 414-420.
- Fridlund, A.J., 1994, *Human facial expression: An evolutionary view*, San Diego, CA: Academic

Press.

- 深山篤・大野健彦・武川直樹・沢木美奈子・萩田紀博、2002、「擬人化エージェントの印象操作のための視線制御方法」『情報処理学会論文誌』43: 3596-3606.
- Hornik, J., & Ellis, S., 1988, Strategies to secure compliance for a mall intercept interview, *Public Opinion Quarterly*, 52, 539-551.
- 飯塚雄一、2004、「視線量の多少が印象形成に及ぼす影響」『島根県立看護短期大学紀要』10: 69-74.
- Kelly, E.W., 1978, "Effects of counselor's eye contact on student-client's perceptions, "Perceptual and Motor Skills, 46: 627-632.
- Kendon, A.,1967, "Some Functions of gaze direction in social encounters, "Acta psychologica, 26: 1-47.
- Kleck.R.E., & Nuessle W.,1968, "Congruence between the indicative and communicative functions of eye-contact in interpersonal relations, "British Journal of Social and Clinical Psychology, 7: 241-246.
- Matsumoto, D. & Kudoh, T., 1993, "American-Japanese cultural differences in attributions of personality based on smiles, "Journal of Nonverbal Behavior, 17 (4) : 231-243.
- Mehrabian, A.,1972, *Nonverbal communication*, Chicago: Aldine-Atherton.
- 村山綾・朝井阿弓美・福井隆雄・三浦麻子、2012、「社会的スキルとアイコンタクト表出の関連について：非接触型アイマークレコーダによる検討」『電子情報通信学会技術研究報告。HCS、ヒューマンコミュニケーション基礎』111 (393) : 15-20.
- Patterson, M.L., 1983, *Nonverbal behavior: A functional perspectives*, New York: Springer-Verlag.
- Schlenker, B.R., 1980, *Impression management: The self-concept, social identity, and interpersonal relations*, Belmont, Calif.: Brooks/Cole.
- Tesseler, R. & L. Sushelsky, 1978, "Effects of eye contact and social status on the perception of a job applicant in an employment interviewing situation, "Journal of Vocational Behavior, 13: 338-347.
- 土屋裕希乃、2012、「NVCスキルトレーニングが社会的スキルに及ぼす影響」『日本心理学会第76回大会発表論文集』92.
- Tsuchiya, Y., 2016, "The Effectiveness of Nonverbal Skills Training in a Conversation with Opposite Gender Stranger, "The 31st International Congress of psychology, 233.
- 山口一美、2002、「自己宣伝におけるスマイル・アイコンタクトとパーソナリティ要因が就労面接評価に及ぼす影響」『実験社会心理学研究』42 (1) : 55-65.
- 山口一美・小口孝司、1998、「サービス産業におけるスマイル研究の展望」『産業・組織心理学研究』11: 3-13.